

## 白鷗大学の思い出

赤 堀 侃 司

### 1. 授業への不安

「光陰矢の如し」の言葉通り、6年間という年月が、知らぬ間に自分の中を走り抜けて行った。前任校の定年の1年半くらい前の10月か11月頃だったと記憶しているが、突然の電話をいただき、白鷗大学教育学部の存在を知った。何故白鷗大学に勤める気になったのか、今でも定かではない。それは、偶然のようで偶然ではなく、何かに引かれるように、バスで思川の橋を渡った。まるで映画の寅さんが故郷を懐かしむ土手の風景が、そのまま実現されたようなノスタルジアと、昭和を思い出させるような川と土手と桜並木があった。歩き疲れた旅人が、ほっと腰をおろして一息つくような優しさがあった。そんな自然を身に浴びながら、私は白鷗大学に赴任した。思えば、こんな有難い職場や環境を持つ大学は、どこを探しても無いであろう。

しかし、そのことを実感できたのは、3年経ってからであった。何故3年後だったのか、その理由を述べるために、前任校のことに触れなければならぬ。私は、定年前に前任校を退職したので、公式な最終講義はなかった。弟子が心配して、東工大ではなく東大の福武ホールで退官記念講演とシンポジウムを開催してくれたのが、白鷗大学に着任する数週間前のことだった。弟子と書いたが、徒弟制が残る大学の研究室では、この言葉が似合っている。大学院重点化が進む大学では、研究指導が中心で、学部は付

属のような存在であった。大学院生を対象にしたゼミや研究が日常的な活動の中心で、授業はどこか頭の片隅に置かれていた。

研究室の雰囲気は、他の理工系の研究室と同じであり、思えば毎日が合宿のような生活であった。学生たちが自主的に行う自主ゼミも盛んで、例えば、C言語やC++言語をもじってつけられた名称である「しごきゼミ」は、教育工学を看板にしているので、システム開発のためのプログラミングは必須の素養で、先輩が後輩に課題を出して鍛えていたが、夜12時から始まっていた。その他にも、毎日のように自主ゼミがあった。朝7時半に研究室に来るのが私の日課であったが、何名かの学生達は泊まっていた。博士課程の上の学年からベッドで寝て、修士1年は椅子に座って寝ていたようだ。

研究室は、職人や芸人や任侠の世界と同じような徒弟制であった。教授を頭にして、秘書やOB、博士課程、修士課程の大学院生からなるピラミッドの組織で研究室を運営していた。公的なゼミや研究会は、夕方6時から行っていたが、そこには都内の大学に勤めるOBや、他の研究者などが、自主的に参加していた。夜8時に終わり、それから全員で研究室や実験室などの掃除をした。掃除は必須であり、これも赤堀研の伝統であった。博士と修士の学生は、16名～20名程度在籍していたが、研究の中心は博士課程の学生であった。最も生きがいのある仕事は、学生との研究打ち合わせであった。学生との打ち合わせは、時間を忘れて没頭した。研究は教えるものではなく、2人3脚で協同して追求するものである。手ごたえのある知見が得られた時は、子どもが宝物を見つけて目を輝かせる時と同じで、学生も私も嬉しくてしかたがなかった。その喜びを共有することは、どこか同志とか弟子とかの言葉がふさわしく、先生と生徒や学生では、どこか違和感がある。

そのような生活にも、若い学生には、気晴らしもあったようだ。赤堀研カレークラブを作って、世界のカレーレシピを参考にして、研究室で料理をしていた。研究室には、水場や冷蔵庫などもあった。料理に凝った学生

の発案であった。またラーメン好きな学生がいて、夜中に評判の高い都内のラーメン屋に車で出かける赤堀研ラーメン同好会もあった。その他、いろいろな活動をしたが、学生達と一緒に国際会議に出かけることも、楽しみの1つであった。英語で論文を書いて採択されることに挑戦させるために、修士から国際会議で発表することを義務付けていた。英語が苦手な学生も多いが、丸暗記しながら発表させた。そして自主ゼミで何度も練習させた。しかし若い学生にとって、研究費で海外に行けることは、大きな魅力だったに違いない。初めての国際会議で緊張しながら英語で発表して、外国の研究者から質問を受けたり、称賛の声を聞いたりした学生は、興奮と感動で言葉と体が躍っていた。それを青春と呼ぶなら、彼らの青春の1コマだったろう。思えば、幸せな日々だったかもしれない。

そのような世界から、自然豊かな小山市にある白鷗大学教育学部に赴任した。それは、良くも悪くも文化が違った。最も大きな違いは、授業であった。先に述べたように、授業は付録のようなものであり、中心の活動ではなかった。大学院生の授業もあるが、ゼミの延長のような内容で、講義ではなかった。講義は、学部で1コマ持ったが、非常勤講師の先生と2人で行った。忙しい時は、その先生に任せた。だから正直に言えば、学部の授業は、私は素人であった。今思えば、学生にも大学に対しても、まったく申し訳なかった。ただし他大学で非常勤講師として講義をしたり、集中講義を行ったりした経験は何度もあるが、どこかそれは頭の片隅に置かれたような存在で、真正面から真剣に取り組んではいなかった。だから、白鷗大学に赴任して、最も難しかったことは、授業そのものであった。なんとか、講義らしい雰囲気にしたかった。もちろん、今日の active learning のような形態も取り入れた。学生は活発に活動するが、それは講義ではなかった。きちんと内容を学生たちに伝えるには、私は知識と経験と技法を持ち合わせていなかった。学生たちにとって、何が難しく、何が易しいのか、それすらもわからなかった。武器を持たないで敵と戦う兵士のような印象だった。

だから、私は赴任して1年目は、学生が悪いと思った。学生のレベルが低いから、授業がうまくいかないだと信じた。その信念が2年目で崩れた。素晴らしい講義をする他の教員は何人でもいるという、当たり前的事实に気が付いたからである。2年目に入って、それは自分の受け持っている講義科目の特性によるものだと、科目のせいにした。これも、3年目になって、その誤りに気が付いた。同じ科目で、素晴らしい授業をする教員は、専任でも非常勤講師でも、何人もいたからである。そして3年目に入って、ようやく自分が悪かったと気が付いた。自分の教え方や技法や、知識や理解などが、すべて劣っていたからだと思えるようになった。もちろん、これまで、自分の教え方などが下手だと思ったこともあったが、それは本心ではなかったような気がする。思えるようになったことが、素晴らしいことなのである。今思えば、有難いとしか表現できない。

白鷗大学に赴任して以来、通勤電車の中では、授業の予習をすることが日課になった。わかりきったことであっても、学生に配布する資料を読まずにはいられなくなった。それは、気づくからである。この資料では、学生は理解できないだろう、知的な面白さを感じないだろう、自分だけの自己満足になっていた、など文字通り気づくようになった。これは晴天のへきれきのような驚きと喜びであった。見えないものが見えるようになった。視力が低くて、外をぼんやりとしか見えなかった人が、眼鏡をかけて、はっきりと見えるようになったという感覚に似ている。ようやく自分も、学生のことが少しわかるようになったのか、白鷗大学の他の先生と同じレベルになったのか、と思えるようになった。正直に書けば、それは3年目から教材などを工夫して5年目くらいから、そのように気づくようになった。だから、永い年月がかかった。それまでは、私は白鷗大学の授業の落ちこぼれであった。

落ちこぼれの感覚は、何か谷に落ちるような気持ちができる。前任校で、海外の国際会議に学生たちを引き連れていくときは、どこか肩で風を切って歩いていたような気持ちがあった。その鼻をへし折られたと言ってもよ

い。自分のような役に立たない人間は、白鷗大学には要らないのではないかと、何度も思った。4月になると桃源郷のような風情をもたらす思川の桜並木も、赴任当初は、何の感慨もなかった。どうしてこんなに派手に花が咲くのだろうと思ったから、落ちこぼれの心境は、理解されるだろう。

人は、人生のつまずきを何度も経験するだろう。それはそれなりに意味があることは、先人たちの教えるところである。反省をし、自分を振り返り、気づくことから、改善という方法を生み出すことができる。私は、教育方法の改善に取り組む必要があると感じて、科研費の基盤研究Bを申請し、4年間の研究を行うことができた。その経費で、研究補助として助手を雇った。学部長の仕事の中で、なんとか勤めてこられたのは、補佐してくれた人がいたからである。思えば、自分が授業の落ちこぼれであったことが、きっかけだった。

## 2. ゼミや卒業研究の指導

白鷗大学のゼミの指導は、基本的には前任校とあまり変わらなかった。先に述べたように前任校では、研究室が生活の中心で、研究室から授業に行ったり、アルバイトに出かけたりというスタイルであったが、これは理工系の文化であり、文科系や社会科学系では、研究は単独で行い、たまに教員がアドバイスを与える指導方法が一般的なので、ゼミや卒業研究指導も、授業の1つという感覚が強いようだ。ただし、私の感覚では、卒業研究やゼミは、他の授業と異なり、研究指導と授業は車の両輪と思っている。

しかし形態は異なっても、テーマの選択やゼミのやり方は、変わらない。つまり学生中心である。ゼミでは学生が調べたことを発表し、質疑応答や議論を中心にし、卒業研究は学生がやりたいテーマを取り上げて研究するという基本は、どこでもまったく同じである。たぶん、他の研究室でも似たような方法であろう。ただ、卒業研究のテーマの内容が、前任校と異なっている場合が多かった。

児童教育専攻のほとんどの学生は、教員採用試験を受けて教員になることを目標にしているが、この進路で悩むことが多い。例えば、教職の勉強をしているが、どうしても教育法規や教育思想などが理解できないなどと相談を受けることがある。私はその時、それは面白い、是非研究テーマにしたらいって、打ち合わせをする。その結果、例えば、学習方法に焦点化して、参考書を読むときの下線の引き方や読解の仕方などについて研究した学生がいた。色の使い方、気づいたメモの取り方、蛍光ペンか、赤ペンかなど、関係しそうな要因を挙げて、調べることにした。

ただし、この調べ方が重要な視点になる。このような研究方法としては、例えば統制群と実験群などに分けて比較実験するとすれば、大勢の人数が必要になる。しかし、そのような実験で得られた結果は、研究としては正統的かもしれないが、実験協力者には何の価値もないことが通常である。つまり協力という名の下で、現実にはやらされているのである。どの大学でも心理学実験や卒業研究などの研究の下で、大勢の学生を実験協力者にすることになりかなり厳しい制限があることは、周知の通りである。授業科目の受講生を卒業研究の協力者にすることは、基本的にはできない。授業を受ける目的で受講しているのに、それ以外の目的である研究対象になるには、本人の承諾以外にも倫理的な課題が残るからである。これは、卒業研究を行う上での難問であった。前任校では、謝金を出して、前任校もしくはそれ以外の大学から募集をして、実験を実施した。つまりアルバイトの仕事として実験に参加してもらうのである。それでも実験内容によっては、学内の倫理委員会に書類を提出する場合もある。

そこで考えたことは、当該の学生自身が実験の対象になることである。そのような1人だけを対象にして、研究結果に対して信頼性や妥当性が保障されるのかという基本的な問題が残るであろう。しかし、単独事例研究法という研究法がある。ある研究者が、研究のために北米の大学に4年間滞在した。小学生の自分の子供も同伴した時、その2人の子供を対象にして、4年間の記録をとって、第2言語である英語の習得状況を克明に記録

して研究した。たった2人ではないかという声の代わりに、4年間も記録したではないかという反論も意味があると気付くであろう。優れた研究論文として、関連学会で高く評価されている。特別支援教育の研究では、大勢の子供たちを対象にすることが不可能に近いことは、誰でもわかる。それよりも、少ない人数でも、長期にわたって継続研究することに、意味がある。短距離の陸上競技選手にとっては、0.1秒や0.01秒を超えることが、大きな壁であることは言うまでもない。それは1人を対象にして、できれば自分自身を対象にして、客観的な方法で記録することが求められるであろう。私が採用したのは、この単独事例研究法であった。

先の学生は、下線の引き方の研究で、黄色い蛍光ペンの下線が、継続研究の結果、他の下線よりも有意に効果的であることを見出した。ある学生は、教員採用試験が近づいても、どうしても勉強に身が入らないと相談にきたので、それは面白い研究テーマだと言って、同じように自分を対象にして継続研究をした。記録メモという手帳に、毎日の勉強時間や気づいたことをすべて記録して分析した。その結果、アルバイトやゼミやスクールサポートなどの他の用事の時間が多いほど、教員採用試験に向けた勉強時間が多くなることを見出した。その相関係数は、0.68という高い値であった。忙しいから勉強できないのは、言い訳に過ぎない、忙しいので時間を大切にしようという気持ちが大切なのだと考察している。もちろん、自己を対象にした研究ばかりではない。ある学生は、幼稚園と小学校の両方の教員免許を取得するように科目を履修していた。そして教育実習に行って、教室の掲示板上に興味を持った。そこで、幼稚園と小学校に出かけて、あらゆる掲示板を写真に撮って、分析した。アンケートなども併用して、子供の作品などの掲示は、子供の居場所づくりに効果的だという知見を得た。そして学校には、温かい色の配置が多いことも見出した。

このように、前任校とは異なった実践的で役に立つ研究ができた。学生に聞くと、自分に役立つという意識が、卒業研究の強い動機づけになると答えた。この意味で、やらされているのではなく、役に立つこと、自分にとっ

て価値があることは、研究における基本であることを、改めて認識した。そして、ゼミや卒業研究の学生たちの純真さや素朴さに触れて、小学校の先生のような優しい気持ちになった。彼らが、嬉しそうにゼミは楽しいね、などと話しているのを聞くと、元気をもらい、生きる力をもらい、癒された。小学校から大学まで、学校とはそのような存在なのかもしれない。

ゼミ以外の時間にも、学生たちが来て、勉強したり談笑したりして、研究室らしい雰囲気になった。夏合宿も同じスタイルで、2泊3日であるが、基本的に朝から晩までの集中ゼミのようなスタイルで、1人30分の持ち時間で3年生と4年生で約20名の発表と議論をすると、どうしても2泊する必要があった。朝は6時半のラジオ体操から始まるスタイルも、前任校と同じである。夜はコンパでトランプなどに興ずる姿は、どこでも変わらず、青春を謳歌していたが、学生たちは素直で明るく、よく学びよく遊びという典型で、宿泊の管理人から、よく褒めてもらったことも、嬉しい思い出である。

### 3. 学部長としての仕事

5年間という永い期間、学部長の役についた。最初の年は、まだ教育学部の先生方の名前もすべて覚えていない状況なので戸惑った。始めにしたことは、先生方のメーリングリストを作ることだった。これは、連絡や会議などで、きわめて効果的だった。教授会の資料なども事前に添付ファイルで受信できたので、事前準備が容易であった。鬼怒川温泉のホテルでの新入生のオリエンテーションには、その規模や贅沢さに度胆を抜かれたが、夕食の前に、参加の先生方すべてに、部屋に集まっていた。ホテルの従業員に部屋を借りたいと言ったら、聞いていませんと苦情を言われたが、しぶしぶ1部屋を用意していただき、館内放送で呼び掛けてもらった。ちょうど40人の椅子があって、メーリングリストの説明だけをした。4月2日だから、学部長に任命されて2日目であった。仁平先生から質問が



あったことを覚えているが、それが学部長としての仕事始めであった。先に述べたように、私自身は授業の落ちこぼれで、まったく自信がなかった時だったので、たぶん先生方にも不安があったのではないだろうか。しかし、それ以来毎年、鬼怒川温泉のオリエンテーションでは、教育学部臨時教授会として位置づけ、約2時間かけて懸案事項を議論したが、それは教育学部の伝統になりつつある。

学部長としては、専攻長・コース長会議は、最も重要で楽しい会議であった。誰もが言いたいことを話し、疑問があれば遠慮なく質問し、時間があつという間に経ったが、充実した時間であった。前任校では、私はドクターミーティングという会議を毎月開催し、博士課程の学生たちと一緒に研究室の運営について議論した。科研費の申請、学会や国際会議での発表、自主ゼミ、研究テーマ、予算と経費など、専攻長・コース長会議とは内容は異なるが、雰囲気はまったく同じであった。専攻長コース長会議で決めたことを、審議事項や報告事項として教授会に提出した。それは、学部長という立場ではなく、先に述べたような一緒に考える共同体であり、同じ仲間という形容が合っている。その意味で、会議で不安や不満に思ったことは、1度も無かった。

教育学部では、教員採用試験の合格者数のことがよく話題になるが、これは時代や社会のお蔭であり、学部長の力量では決していない。地方にあって最も安定した仕事は、教員、市役所、税務署、警察署などの公務員であることは言うまでもない。先行き不安定な社会において、教員志向、公務員などの決して倒産しない職場を目指すのは、人情である。保護者も本人も、そのような志向で教育学部を受験することは、自然であろう。さらに、教育学部の教員は、名称が示すように、どこか教育に情熱を持つ人が多い。研究志向よりも教育志向であり、正しいか間違っているかを明確に証拠として示す冷たいイメージを持つ研究志向よりも、間違っても将来になんとか敗者復活戦もあるからという暖かさのイメージが教育志向にある。それが、教育学部のイメージとして高等学校側に伝わっているという印象

を持っている。白鷗大学の学生が、先輩として出身校に帰って後輩に伝える言葉は、きわめて重い響きを持っている。それが、教育学部の受験生に活着していると、感じている。急がば回れの格言どおり、地道な授業への努力、ゼミや卒業研究の指導、アドバイスなど、学生との膝を交えたコミュニケーションが、今日の教育学部を支えている。

しかし、そのことと教員採用試験の合格者数とは、直接には関係しない。現在の教育学部の教育や授業は正統的であり、決して受験対策を念頭においた授業ではないことは、どの教員も、どの学生も知っている。それは大学だからである。他の教員養成の私学では、教員採用を念頭においたカリキュラムや指導法もあると聞いているが、それは大学のとるべき道ではないとして、教員に定着している。したがって、教員採用試験の合格者数の増加は、時代や社会の影響、直接的には進路指導部の指導のお蔭である。そして、学生ラウンジや図書館、研究室などを利用した自主的な勉強という、学生自身の努力のお蔭である。大学の授業や指導は、合格という椅子に座らせることなく、自立する人間を育てることである。その意味で、臨時採用教員を経験して、晴れて正規採用教員になる卒業生も多いが、それは本物の教員になるであろう。目先の数字だけに目を奪われてはいけない。しかし着実に教員採用試験合格者数が伸びていることは、白鷗大学教育学部の教員志望の学生の優れた素質と、自主的に学ぶ主体性によるところが大きい。正確に記せば、学生自身の努力と、進路指導部の指導と、大学の授業やスクールサポートなどが有機的に連携して、成果を上げていると言える。

しかし反面、教員や公務員などの安定志向が強く、冒険を避けるのは、地域の文化特性によることも大きい。これからの社会では、チャレンジし自分の力を発揮するような人材を育成する必要がある。宇都宮市で毎年開催される白鷗大学主催の企業の方への感謝の日では、地元企業の経営者と話すことが多いが、教員や学校の世界とは別のダイナミックな生き方をしている姿に感銘を受けることが多い。このようにして世の中と戦い、

生き、精一杯自分を表現して、会社を経営するという姿は、人としての生き方そのものであり、教育を超えた哲学のような気がする。教育学部に入学するすべての学生が、教員に向いているとは思えないし、安定志向だけで将来を決めては後悔するだろうし、教員免許だけほしいという小さな世界から、もっと広い視野で世の中を見てほしい、と考えれば、別の教育学部のあるべき姿が浮かんでくる。特に2018年以降は、大学にとって厳しい時代がやってくることは必至であることから、教育学部のカリキュラム改訂委員会を発足させて、調査や大学訪問やモデルカリキュラムなどを、検討してきた。それは現在でも続いているが、教育学部の知恵を生かして、2018年以降も生き残ってほしい。

教員採用試験やカリキュラム改訂以外にも、いろいろな出来事があった。学部長になった年に、文科省による教員養成の実地調査があった。文科省の誰が担当するのか誰も当日まで知らなかったが、山際隆先生が調査委員長だった。山際先生とはよく知っている間柄だったが、挨拶の時、厳しく調査しますと、言われた。仕事柄当然であったが、公私の区別の厳しい先生で、その日の午後に早退されたが、都内の病院に直行されたという。大手術を受ける、その術前に病院から、教職員が一丸となって情熱をもって教育をしている、将来が楽しみだと書かれたメールをいただき、教育行政にかける先生の生き様に触れたような気がした。その後、手術の成功もむなしく数年して他界されたが、古武士を思わせる人柄だったことに、胸が熱くなった。キッズユニバーシティ小山も、スポーツの藤井先生、哲学的場先生、ダンスの内山先生、心理学の伊東先生や伊崎先生、経済学の市川先生など、小学生を相手に奮闘される姿を見た時の笑いと感動を思い出す。教育学部10周年記念での工藤直子さんの詩の朗読も、心洗われるような感銘を受けた。他にも多くの心に残る出来事があった。思えば、1つ1つが、映画のように頭の中を通り過ぎていく。私にとって、かけがえのない大切な1コマ1コマである。

## 4. 終わりに

紀要編集の先生に無理にお願いして、略歴とか研究業績などは、省略させていただいた。研究業績の多くは大学院生との共同研究であり、必要ならば、インターネットで調べればすぐに入手できるが、ほとんどの読者は興味ないであろう。白鷗大学での研究は、私の永年の研究テーマである「メディアと学習」であったが、3年間の挑戦的萌芽研究の科研費の助成を受けて、研究のまとめを「タブレットは紙に勝てるのか」という題名で市販した(赤堀、2014)。私の研究業績や履歴は書くほどのものではなく、先に述べたように、授業も研究も他人に誇るようなことはほとんどないと、謙遜ではなく思っている。ただ、運が良かっただけである。白鷗大学に着任できたのも、幸運の女神に導かれたのだと思っている。

この6年間で多くの人にお世話になった。上岡理事長には、この紙面では書ききれないほど多くの支援を受けた。記して厚くお礼申し上げたい。奥島学長、北山副学長、江頭事務局長をはじめ、同僚というより同じ仲間と呼びたい教育学部の多くの先生方、驚くべき緻密さと根気さで仕事を進める事務職員の皆さん、そして私の研究室を選んできたゼミの学生や卒業生など、深く感謝申し上げます。ハワイ大学教育学部長のドン先生とも、どこかノスタルジアを感じるような温かい交流ができたことも、忘れがたい思い出である。縁があったら、皆さんにまたお会いしたい。

人は誰でも、他人に語って聞かせる物語を持っている。白鷗大学の6年間は、私にとって大切な物語の1つである。1つ1つが輝いて、走り去ったその時その場が浮かんでくる。その思い出と皆さんに感謝して、この原稿の筆をおきたい。ありがとうございました。

## 参考文献

赤堀侃司(2014)「タブレットは紙に勝てるのか」,ジャムハウス,東京